

折に触れ 四字熟語

NO. 42 『死生契闊』 しせい けっかつ

< 意味 > 生死を共にすることを約束し、共々に勤め苦しむこと。死ぬも生きるも苦勞を共にする意から。

< 出典 > 「詩經」< 邶風 > 擊鼓

擊鼓其鏜	踊躍用兵	鼓を撃つこと其れ鏜と 踊躍するに兵を用ふ
土國城漕	我獨南行	土國は漕に城きづき 我獨り南に行く
從孫子仲	平陳與宋	孫子 仲 に從ひて 陳と宋とを平らぐも
不我以歸	憂心有仲	我と以に歸らず 憂心 仲 たり
爰居爰處	爰喪其馬	爰に居り爰に處る 爰に其の馬を 喪ふ
于以求之	于林之下	于以にか之を求む 林の下に
死生契闊	與子成說	死生契闊 子と 說 を成す
執子之手	與子偕老	子の手を執りて 子と偕に老いんとす
于嗟闊兮	不我活兮	于嗟 闊 なり 我を活かさず
于嗟洵兮	不我信兮	于嗟 洵 なり 我を信ぜしめず

通 釈： 鼓を撃つ音がドーンとひびき、ほこを手に踊りあがる。邦国は漕の地に城を築くとて、私はひとり南に向かう。孫隊長に従って、陳と宋とを平らげたのだが、私はおきざりにされてしまった。憂いに心がうちふるえる。(おきざりにされた私は) この地に留まり続け、この地で馬までも失った。馬はどこにいるかという、郊外の原野にねむっているのだ。

< 妻が唱う > 生きるも死ぬも離れずにいようと、あなたと悦びを成しました。あなたの手をとって、ともに老いようと誓いました。

だのにああ神よ、何と遠く離れていることか。私はもう生きていられない。ああ神よ、何と久しく別れ別れになっていることか。私はもう信じられない。

語 釈： 「邶」は古代中国の地名。「鏜」は鼓を打つ音。「土国」は国、邦国のこと。「漕」は衛の邑。「于嗟」は神に祈る声。

一 言： 死シリーズその2

詩經はNO. 38に記載の通り、古代中国の風土社会を背景に、そこに生きる人々の生活を歌った最古の詩歌集です。その中で国風とは、周王朝の時代における諸侯の国々の民間に謡われた歌謡を集めたもので、「邶風」とは邶という国のそれです。

参照文献： 明治書院 新釈漢文大系「詩經」上 三省堂「四字熟語辞典」